

運営に関わって

大西 洋

神戸大学
教授

おおにし・ひろし／

東京大学から神奈川科学技術アカデミーを経て神戸大学が3つ目の勤務先です。2017年度から3年間の予定で日本学術振興会の学術システム研究センター専門研究員（英語職名はprogram officerで俄然かっこよく響きます）を有給兼務しています。月給が増えたのはうれしいですが、忙しくなっていました。



共同利用研究におけるデュアルサポート

共同研究専門委員を2017年度まで3年間担当しました。主な業務は共同利用研究・分子研研究会・岡崎コンファレンス・若手研究活動支援への申請を審査することです。大学共同利用機関法人である自然科学研究機構の一翼をになう分子科学研究所には、毎年たくさん申請が全国から寄せられます。これらの申請書類に接していると「共同研究が盛んになった」という感慨をまず覚えます。

筆者が教員になりたての1990年代には、測定対象となる物質の合成と計測評価、場合によっては計測評価装置の開発までを一つの研究室がカバーすることがめずらしくありませんでした。四半世紀を経た今日では、研究テーマごとにエキスパートを糾合した機関横断チームを編成することが、分野横断活動かつ研究資源の高効率運用として推奨されています。科学研究費の基盤研究をみても複数PIが機関をまたいで協働する課題が増えています。国家横断チームの編成を支援する新種目（国際共同研究加速基金）が設けられています。大学共同利用機関でなくとも機関横断研究があたりまえになりつつある時代に、大学共同利用機関ならではの共同利用研究をどのようにプロモートしていくか？ これは分子科学研究所にとって大切な課題であるといえましょう。

研究資金の配分では「研究者が必要最低限の研究ができる環境を整え、個

別研究が大きく発展するチャンスがあれば競争的研究費を機動的に投入する」デュアルサポートが基本です。これにならって考えてみます。最先端の研究設備と研究支援能力を共有するナノテクノロジープラットフォーム事業は、必要最低限の研究ができる環境を全国の研究者に提供する活動にあたると思います。たとえば筆者が所属する大学には開放利用できる電界放射型走査電子顕微鏡（FE-SEM）がありません。新しく合成した光触媒微粒子を10 nm分解能で観察したければ他所へ借りに行くか、受託分析サービスを有償発注しなければなりません。中小規模の研究機関が自力で整備できない高性能の汎用装置をビジターに提供することがプラットフォーム事業に期待されています。

提供する側の苦心は（1）良好に動作する状態に装置を保つメンテナンス（2）初心者講習の充実（3）装置の陳腐化対応でしょうか。購入した時には最先端の装置であっても、3年後には後継機種がリリースされ、5年で制御PCのOSが更新されてゆく状況のもとで陳腐化を避けるとしたら、買い取りよりもリースが有効かもしれません。装置メーカーは岡崎にショールームを開設するつもりで格安リースを提供し、分子科学研究所は十分な技量でユーザー対応できる人員と設置場所を提供する双方持ち寄りによる開放機器整備です。プラットフォーム事業は企業研究者もユー

ザー利用できるしくみなので、装置メーカーは学界・産業界を問わず潜在顧客の開拓というメリットを期待できます。分子科学研究所は、調達経費を抑制しつつも、最先端研究設備と研究支援能力を全国の研究者に提供できます。

さて、このように工夫した開放利用から新しい研究が芽生え、大きく発展するチャンスをつかんだとします。チャンスに恵まれた研究を機動的に支援し、一緒に育てていくために共同利用研究を活用してほしいと思います。チャンスに恵まれた研究であるなら、競争的研究費による経費支援が得られることを前提とした制度設計が望ましいでしょう。研究資金は自分たちが調達するとして、分子科学研究所が何を支援し提供することが求められているでしょうか。所長・元所長をはじめとしてオーラを放つシニア研究者に研究相談する機会を提供するのはどうでしょう。読者のみなさんによいアイデアはありませんか？

分子科学分野の研究者なら誰もが知っている分子科学研究所ではあっても、共同利用研究の申込みを待っているだけではなく、これぞと思うネタを所外へ探しに行く技術営業活動があってもよいでしょう。分子科学にこれまで縁のなかった人たちにも分子科学研究所を活用してもらいたいです。